

第一日曜日  
主日第一礼拝 9:00～  
主日第二礼拝 10:30～  
その他の日曜日  
教会学校 9:00～  
聖書を読む会 9:00～  
主日礼拝 10:30～

# 日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2020 (令和2年) 11. 8

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276  
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

祈禱会  
第2日曜日 礼拝後  
成人会  
第3日曜日 礼拝後  
婦人会  
第4日曜日 礼拝後  
教会附属 南部坂幼稚園

## 「分裂の時代へ」

牧師 松谷 祐二

### 列王記上 第一章九～一三節

ソロモンの心は迷い、イスラエルの神、主から離れたので、主は彼に対してお怒りになった。主は二度も彼に現れ、他の神々に従ってはならないと戒められたが、ソロモンは主の戒めを守らなかった。そこで、主は仰せになった。「あなたがこのようにふるまい、わたしがあなたに授けた契約と掟を守らなかったゆえに、わたしはあなたから王国を裂いて取り上げ、あなたの家臣に渡す。あなたが生きている間は父ダビデのゆえにそうしないでおくが、あなたの息子の時代にはその手から王国を裂いて取り上げる。ただし、王国全部を裂いて取り上げることはいらない。わが僕ダビデのゆえに、わたしが選んだ都エルサレムのゆえに、あなたの息子に一つの部族を与える。」

(新共同訳聖書)

即位した当初は良い王であったが、次第に墮落し、晩年は見る影もなし…というパターンは、聖書に登場する王たちに、まるで宿命のように多く見られます。サウル王しかり、ダビデ王しかり、ソロモン王もそうでした。

神からの知恵に満ち、神殿建設をなしたとげたソロモンでしたが、外国から多くの妻を迎え、外国の神々の宗教を導入し、何と自らも礼拝するようになり、十戒の第一戒は「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」。他の神々を拜むという大罪を犯して悔い改めようとしていない王に、神は「あなたから王国を裂いて取り上げ」と宣告されました。

ソロモンの死後、息子のレハブアムが王位を継ぎますが、その家臣であったヤロブアムが反旗を翻し、イスラエルの十二部族のうち、十部族までがヤロブアムに従います。対するレハブアムが支配できたのはただ一部族、ダビデ家が属するユダ

族(と、事実上ユダ族に吸収されていたベニヤミン族)のみでした。かくして紀元前九二二年、王国は「イスラエル(北方、十部族)」と「ユダ」(南方、ユダ族)の二つに分裂し、この後約二百年、南北二人の王が並び立ち、相争うことになりました。こうなってしまった大元の原因は、ソロモンの背信。また、分裂の直接の契機も、ソロモンのレハブアムの傲慢な統治姿勢にありました。そんなレハブアムにもかろうじてユダ族が従い、都エルサレムや神殿が残されたのは、ひとえに、ダビデになされた約束(月報9月号参照)を重んじての、神のお計らいがあつたからです。それにも関わらず、レハブアムとユダの人々は、ソロモンの導入した異教的な礼拝から離れませんでした。

他方、ヤロブアムと十部族も、悪い王に反対したから即、正義、とは言えません。彼らの決起も、それによってソロモンの罪に審判を下そうとなさる、神のお計らいがあつて成功したのであり、彼らは彼らで、神に忠実に従っていく責務がありました。しかるに…

### 列王記上 第二章二五～三〇節

ヤロブアムはエフライム山地のシケムを築き直し、そこに住んだ。更に、そこを出てベヌエルを築き直した。ヤロブアムは心に思った。「今、王国は、再びダビデの家のものになりそうだ。この民がいけにえをささげるためにエルサレムの主の神殿に上るなら、この民の心は再び彼らの主君、ユダの王レハブアムに向かい、彼らはわたしを殺して、ユダの王レハブアムのもとに帰ってしまうだろう。」彼はよく考えたうえで、金の子牛を二体造り、人々に言った。「あなたたちはもはやエルサレムに上る必要はない。見よ、イスラエルよ、これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神である。」彼は一体をベテルに、もう一体をダンに置いた。この事は罪の源となった。民はその一体の子牛を礼拝するためダンまで行った。

ヤロブアムは自らの王権を宗教的な面から強化

するため、北イスラエル十部族の領域の南限・北限(ベテルとダン)あたりに、勝手に神殿を増やしました。しかも、礼拝するために設置したのが何と「金の子牛」！昔、出エジプトの後、モーセがシナイ山に登って神から教えを受けていた間、麓でイスラエルの人々が勝手に造り、その周りで飲み食いし、踊り狂い、神を憤激させたのは、まさに「金の子牛」です。

### 出エジプト記上 第三章三～四節

民は全員、着けていた金の耳輪はずし、アロンのところに持って来た。彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。

十戒の第二戒は「あなたはいかなる像も造ってはならない。…それらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」。ヤロブアムと十部族も、神の忌み嫌われる罪を犯して省みることはありませんでした。

二つに分かれた王国の南も、北も、どちらも神の言葉に本当には聞き従おうとしません。それでいて、南ユダはエルサレムの神殿を誇り、北イスラエルはベテルとダンの金の子牛を誇る。自分たちの国、政治体制こそは神の(神々の?)支持を得ているのだと言わんばかりに。

自らの欲望や野心の正当化に神を利用し、神を人に仕えさせようとする、このような罪深い行いは、昔のイスラエルの人々だけのことではありません。キリスト教の歴史も、同じ罪を幾度も繰り返してきました。今日でもやはり、同じようなことが起きています。その結果は人間同士、いよいよ出口の見えない争いです。

主イエスはお教えになりました。「御国を来らせたまえ(神の国が来ますように)」と祈りなさい、と。人の支配ではなく、神のご支配が行きわたりますように。

# 日々の平和と健康に感謝

ヤング肇子(けいこ)

段々と、朝夕冷えてきて春が待ち遠しく思える季節にもうすぐ、突入しますね。

私たちは毎日、自分の家族ともに健康が守られて、平和に、そして何事もなく一日が終わることが当たり前のように感じてしまっています。けれども、新聞やテレビのニュースなどを見たり、読んだりしていると、何事もない日は一日たりともありません。どうしてこのような出来事が起こるのだろうかと不安や疑問を覚えることばかりです。火事などの人災もそうですが、大きな自然 災害、たとえば数年前の大阪北部地震や北海道中部地震、そして、私が住んでいた岡山の倉敷市も二〇一八年七月に西日本集中豪雨の被災地となって、さまざまに自然の猛威を目のあたりにしました。多くのボランティアの人たちが日本の各地から来てくださり、毎日、汗を流してホコリにまみれて、夏の炎天下で作業をして下さっていた姿や、被災した人たちの苦悩に満ちた顔、そして、とても住むことができない無残な家屋の姿が、今でも目に焼き付いています。二年間ほど、ほとんどの家屋は乾燥させるためにドアや窓がすべてはがされ、開けっ放しになっていました。建て替えるにも高齢の人たちが多く、経済面ばかりでなく、気力の障害は大きかったと思います。

この集中豪雨で倉敷市真備町の老人施設

に入居していた当時九十歳になる私の母も被災しました。短時間で押し寄せた水に首まで浸かって、数時間水中にいたそうです。

車いすの生活のために歩けない母は、他の二十三名の老人たちとともに職員三名に支えられ、屋根に引き上げられ、救助隊が来るのを待ち、三つのグループに分かれ、母のグループはゴムボートで高い位置にある井原鉄道の駅のプラットホームへ一旦は避難したのですが、あまりにも急速に増してくる水の量に、また降りて他へ連れていかれたそうです。そのあたりから本人に記憶はありませんでした。

避難所にいた母のもとに私が駆けつけた時、母はずぶ濡れのポケットから入れ歯を出して見せました。「これが無いと私はご飯が食べれんから、これだけはつかんで持ってきた。」と言ったのです。母のその言葉に、生きようとする力、生命力を強く感じました。押し寄せた水に首まで浸かりながら、彼女は必ず助かると信じていたようです。

神さまの恵みに感謝するとともに、これから寒くなる季節に家もなく路上生活を余儀なくされている方や病に倒れている方など困難の中にいる人たちのために祈ります。

## 報告

\*十月四日の主日礼拝から、コロナ対策を取りつつ聖餐を再開しました。配餐の係は、手袋とトンクを使ってパンを配りま

した。また、配餐開始前に、手指の消毒ができる時間を取ります。ご協力を有難うございました。

\*十月十一日の主日は神学校日・伝道献身者奨励日でした。例年は東京神学大学に神学生の派遣を依頼してきましたが、今年度はコロナ禍で派遣が難しい事情があるため、通常の礼拝を守り、神学校を覚えて祈ることとしました。

\*麻布南部坂教会の百周年記念文集を、今年度中の発行を目指すこととなりました。教会員の皆様に、お一人八〇〇文字程度(より短くとも可)の原稿をお願いします(すでに提出して下さっている方は除きます)。内容は、百周年に当たって思うこと、思い出、詩や短歌など自由にお考えになって結構です(修正が入ることもありますので、ご了承ください)。原稿用紙に書いて牧師にお渡し下さるか、またパソコン等で作成したデータを church@nanbuzaka.com までお送りください。締め切りは年内とします。ご協力をよろしく願います。

\*各献金(月定献金・特別献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、会堂建築献金)へのご協力を、引き続き宜しくお願いします。

## 各部報告 十月度

## 成人会

次月へ

## 婦人会

日時 十月二十五日 主日礼拝後

場所 教会堂会議室

出席者 八名

開会祈祷 菊池才知子姉

閉会祈祷 各自小祈祷

内容

旧約聖書 サムエル記上二十七・二十八章

ダビデはサウルの執拗な殺意を避けるため、家族と手兵を伴い、イスラエルの敵対勢力であったペリシテに逃れた。ガトの王アキシュはダビデを受け入れ、ツイクラグの地を与えた。ダビデはペリシテの地で如何に振舞うべきかを考えねばならず、イスラエルの敵対氏族を攻撃しては全滅させ、アキシュには親イスラエルの部族を襲ったと伝え、アキシュの信用を得た。

ペリシテ人はイスラエルと戦うことになり、軍を集結させた。サウルはその軍を見て恐れた。主は夢によっても、ウリムによっても、預言者によってもお答えにならず、サウルはすでに国内から追放した口寄せを探させた。見付けた女のいのちを保障しサムエルを呼び起こさせた。サムエルは、サウルを離れた主のみ旨を伝えた。怯えたサウルに口寄せの女は「出エジプト」の過ぎ越しの食事を思わせる食べ物を与え、サウルとその軍を立ち去らせた。

次回 十一月二十二日

「サムエル記 上」二十九章～三十一章

